

令和元年度 文部科学省委託事業 「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」  
テーマ3 「校長及び教員としての資質の向上に関する指標と研修の効果的な連動に関する研究」  
委託事業成果報告書

# 山形県教員指標に対応した 英語教員研修 e ポートフォリオの構築

## 委託事業成果報告書

2020 年 3 月

山形大学

本委託事業成果報告書は、文部科学省委託・令和元年度「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」テーマ3「校長及び教員としての資質の向上に関する指標と研修の効果的な連動に関する研究」により、研究課題「山形県教員指標に対応した英語教員研修 e ポートフォリオの構築」で実施したものである。

令和元年度 文部科学省委託事業 「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」  
テーマ3 「校長及び教員としての資質の向上に関する指標と研修の効果的な連動に関する研究」  
委託事業成果報告書

## 山形県教員指標に対応した 英語教員研修 e ポートフォリオの構築

### 委託事業成果報告書

2020 年 3 月

山形大学



## はじめに

地域教育文化学部長 大森桂

山形大学は、昭和 24（1949）年 5 月に、教育学部、文理学部、工学部および農学部を持つ新制大学として開学しました。その母体の一つであった山形師範学校時代を含めると、140 年以上にわたり、名称や体制の変更はありながらも、当学部は地域に根ざして教員の養成や研修に携わってきました。

本学においては、文部科学省の「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」として、昨年度の 2 件の採択に引き続き、今年度は、「山形県教員指標に対応した英語教員研修 e ポートフォリオの構築」の調査研究が採択されました。本学の教員を中心に、県教育委員会をはじめ、県内外の教育関係者等と連携して進めた一年間の事業成果をここに報告するものです。

近年、教員の資質向上が社会的に求められており、山形県は、平成 30 年 1 月に山形県教員「指標」を策定しています。この中で、ICT 機器の適切な活用ができることは、着任時から求められる重点項目の一つとなっています。これからの時代、ICT の活用は、子どもたちの指導に有効であるだけでなく、教員自身の主体的な学びや働き方改革の観点からも有意義です。教員の資質向上のためには、日々多忙な教員が、学び続けるモチベーションを維持し、自己研鑽に取り組むことができるよう支援する必要があります。その手立てとして、当事業では、個々の教員に学習結果がすぐにフィードバックされ、研修履歴を電子形式（e ポートフォリオ）で保存できる機能を有した、教員の主体的な学びをサポートするシステムを構築しました。今回は、本学が学生の教育のために既に整備・活用している LMS（Learning Management System）、Webclass を教員研修にも援用した点が大きな特徴です。大学の既存システムの活用により、システム開発のための経費や労力の大幅な削減が可能となりました。依然、日本の学校教育における ICT 活用の現状は、世界標準から大きく遅れていると言われており、地方の学校においてこそ、リソースを有効活用し、ICT 活用を推進することの必要性および有益性は一層高いと考えられます。当事業のアンケート結果からは、学校教員の研修に対する意欲や開発したシステムに対する好評価が読み取れると同時に、ICT 機器の運用に関する課題も見受けられました。当事業の成果や課題をふまえ、今後の教員養成・研修の更なる充実にむけて、学部としても鋭意取り組んで参ります。本報告書をお読み頂き、忌憚のないご意見・ご要望をお聞かせ頂ければ幸いです。

最後になりましたが、当事業の実施にあたり、多大なる協力を賜りました関係者の皆様に心から感謝申し上げます。



## 目次

はじめに	5
第1章 本調査研究事業の概要	9
第2章 本事業の課題・目的・方法・組織	13
第1節 本調査研究の課題意識	14
第2節 本調査研究の目的	15
第3節 本調査研究の具体的な内容・取組方法	16
第4節 本調査研究の具体的な実施体制・組織、連携体制	19
第5節 本調査研究の実際（活動日程）	21
第6節 本調査研究事業の実績	22
第2章 英語教員研修 e ポートフォリオ実施内容	25
第1節 第1回、第2回、第3回研修	26
第2節 認定講習 傾向と分析	37
第3章 教育プログラムの評価 実施後のアンケート調査と分析 英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会による意識調査	47
第1節 調査の概要	48
第2節 調査結果 傾向と分析	50
第4章 教育プログラムの評価 分析結果の考察	75
第5章 教育プログラムの評価 検証 これからの e ポートフォリオを活用した英語教員研修	79
参考文献	85
参考資料	95
「英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会による意識調査」	





# 第 1 章

## 本調査研究事業の概要

## 本調査研究の概要

### テーマ3

「校長及び教員としての資質の向上に関する指標と研修の効果的な連動に関する研究」

### 研究主題

山形県教員指標に対応した英語教員研修 e ポートフォリオの構築

### 概要

山形県教員指標に対応して学び続ける英語教員研修を育成するため、e ポートフォリオの研修システムを構築する。

- ①山形県教育委員会と連携して、開発検討委員会を設置し、システム設計と構築を行う。安価で使いやすい情報システムとして、山形大学で運用している LMS (Learning Management System) ,すなわち、日本データパシフィック社が提供している WebClass を活用する。
- ②現職教員に対し研修システムの試行を行い、事後に質問紙調査を実施して効果を検証する。
- ③先行事例調査を行い、開発に反映させる。

【テーマ3】 団体名 山形大学 地域教育文化学部

## 「山形県教員指標に対応した英語教員研修 eポートフォリオの構築」

### 目的・概要等

安価な情報システムとして、大学のLMS(Learning Management System)を活用し、山形県教員指標に対応した英語教員研修を実施するため、eポートフォリオのシステム設計と構築を行い、その試行を行う。

### 実施方法等



### 成果目標等

- ① eポートフォリオによる研修を通じて、**新たな教育課題に対応する教員の専門的資質・能力の向上**
- ② 安価な情報システムによる、**eポートフォリオ構築のモデル・ケースの提示**
- ③ 大学と県教育委員会による、**研修の一体化・連携・協働の在り方・モデルの創出**

※枠内を自由に使って御説明ください。



## 第2章

### 本事業の課題・目的・方法・組織

## 第1節 本調査研究の課題意識

・平成29年に教育公務員特例法等の一部を改正する法律が施行され、それに伴い、校長及び教員としての資質の向上に関する指標の全国的整備が図られた。山形県においても、山形県教員資質向上協議会が設置され、平成30年1月に、山形県教員「指標」が策定された。中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（平成27年12月21日）においては、「こうして整備される教員育成指標を踏まえ、各教育委員会や各大学において教員研修や教員養成が行われることが重要である」とされており、特に、次のように課題を指摘している。「教員が日々の業務で様々な対応に追われる中においても自己研鑽に取り組み、学び続けるモチベーションを維持しつつスキルアップを図ることができるよう、教員の主体的な『学び』を適正に評価し、その『学び』によって得られた能力や専門性といった成果を見える形で実感できるような取組やそのための制度構築を進めていくことが急務である。」

・こうした課題に応えるための方策の一つが、教員自身の研修をポートフォリオとして構築していくことである。ポートフォリオは、与えられたものから何かを学ぶのではなく、学習者が、自ら主体的かつ継続的に、目的意識を持ち、学習履歴を残していく、学習者中心の学びである。その履歴を学習者と指導者が共有し、学習者の学びや将来の展望に役立てることになる。それは、教師自身が自らの研修履歴を振り返ることができると同時に、学校管理職等が教員の研修履歴からその教員の強みや課題意識を知り、さらなる専門性の向上への指導を行う際に活用できるものである。

・以上の学習履歴の保存と管理を、日々の忙しい業務の中でも容易にするために情報システムが活用される。それがeポートフォリオである。このeポートフォリオを構築し、実践する取り組みは、学校教育現場において、まだ実践例は限られるが、徐々に広まりつつある。また、このようなeポートフォリオを研修システムに導入している自治体の教育委員会は、文部科学省の調査によれば、平成29年度時点において、18.3%にとどまっており、さらなる活用が望まれる。

・そこで、本調査研究事業では、次のような課題意識のもとに、研究を進めることとした。

第一は、山形県教員「指標」のうち、「教師としての専門性の構築・専門教科の指導力強化」にある「29 英語教育や道徳教育、人権教育、環境教育、国際理解教育など、今日的な教育の動向を把握し学校全体に広めることができる」における、「英語教育」に焦点を絞り、その指標の向上と連動した研修システムの構築を目指すことである。具体的には、第二言語習得論に基づく、新しい英語学習法・指導法の核となる、学習到達目標（CAN-DO リスト

等)に基づいた言語活動、パフォーマンス・テストなどによる、四技能・五領域に関する学習法及び指導法などを、山形県の教員が身につけていくことを狙いとする。

第二に、教員が、「自己研鑽に取り組み、学び続けるモチベーションを維持しつつスキルアップを図ることができるよう」に、その研修の蓄積を活用できるようなeポートフォリオの研修システムを構築する。その際、情報システムの構築に多大なコストや労力がかからないように、山形大学の既存の情報システムを利用した研修システムの構築をはかる。

第三に、以上の取組みを、山形大学と山形県教育委員会の連携のもとに進められるように、研修システムとプログラムの開発検討委員会を設ける。その検討委員会を中心となって研修システムの試行と効果検証を行い、教員育成指標にもとづく研修との連動とのモデル・ケースとなるようにする。

## 第2節 本調査研究の目的

本調査研究の目的は、次の2点である。

### ① 英語教員研修のためのeポートフォリオを構築する

教育委員会等から提示された研修会に出席し、学び、最後に研修の感想・要望などをアンケートに記載し、提出するという従来のスタイルと異なり、本事業は、英語教員は何を学ぶかという明確な目的意識を持ち、主体的に学ぶ形で受講することになる。その際、教職員の研修履歴を電子的な形で蓄積した上で、管理職とその情報を共有し、教職員の学びとキャリア形成を共に考えていくためのシステム作りとなる。

### ② LMSのWebClassを活用して、安価に、英語教員研修のためのeポートフォリオを構築する

しかし、上記のeポートフォリオを構築するためには情報システムの整備が不可欠であるが、その整備と維持に、多大なコストと労力がかかる。それを補完するため、山形大学で現在、運用しているLMS(Learning Management System)のWebClassを活用する。具体的には、WebClassの「eポートフォリオ・コンテナ」機能等を活用する。eポートフォリオ・コンテナ等は、一種のフォルダであり、学習目標や学習成果、その成果に対する評価を蓄積し、一元的に管理できる。

また、評価規準としてゴールを設定することができ、評価指標となるルーブリックを用いて評価を行うことができる。さらには、自己評価(セルフ・アセスメント)、相互評価(ピア・アセスメント)などの評価を行うことも可能である。可能であれば、適宜、これを活用し、英語教員研修のための e ポートフォリオのシステム設計と構築を行う。このシステムを用いることにより、指標を効果的に現職教員に周知させるとともに、現職教員が効果的に教員研修計画にアクセスし、活用できるようにする。そして、教員の研修の効果を定量的データ及び定性的データに基づき、検証を行う。

### 第3節 本調査研究の具体的な内容・取組方法

#### ① 山形県教育委員会と連携して、開発検討委員会を設置し、システム設計と構築を行う。

##### A. 山形大学・山形県教育委員会・現職教員の緊密なつながりを構築する

山形県教育委員会による英語教員研修を、山形大学や近隣の学校等施設を会場にして実施する。山形大学の教員ならびに外部著名講師は公開講座を開講し、現職教員はそれらに出席し、研修をする。研修の際には、e ポートフォリオを形成していくため、山形大学のLMS(Learning Management System)のWebClassを活用する。このように、山形大学・山形県教育委員会・現職教員の緊密なつながりを構築することとする。

##### B. 本調査研究を進める組織として、大学教員と山形県教育委員会による「英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会」を設ける

上記の点も踏まえ、本事業に対する山形県教育委員会の意向も、反映させた取り組みにする必要がある。それゆえ、本調査研究を進める組織として、大学教員と山形県教育委員会の担当者による「英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会」を設ける。3 回程度開催し、英語教員研修 e ポートフォリオの構築の開発等の検討を行う。山形大学と山形県教育委員会とが協働してプログラムの作成・検討を行うことにより、今後、山形県における「養成・採用・研修の一体的改革」を進める「具体的な制度的枠組み」の一環となるようにする。

#### ② 現職教員に対する質問紙調査と、先行事例調査を実施し、その結果を開発に反映させる。



## A. プログラムに対する質問紙調査の実施

上記の研修が、山形県内の小学校・中学校・高等学校の教員の要望に沿ったものでなければならない。それゆえ、現職教員及び教職大学院の現職教員学生に、専門性の向上への寄与と学びやすさの点から簡単なアンケートを実施した上で、山形県教育委員会と意見交換をし、英語教育の現状を踏まえつつ、研修の内容を策定、構築していくこととする。

## B. 先行事例調査を実施する

大阪教育大学や大阪府教育委員会などの視察を行い、山形県外の本調査研究に関連する取組についても視察を行い、システム設計の検討に役立てるようになる。

- ③ 経費削減を視野に入れ、安価なシステム構築を念頭に置き、既に山形大学で運用している LMS (Web Class) を情報システムとして活用する。

## A. 英語教員研修のための e ポートフォリオの構築

英語教員研修のためのポートフォリオ構築は、LMS (Learning Management System) の WebClass を使う。管理者権限を持つネットワーク・センターに依頼し、研修用のコース「英語教員研修」を新たに開設する。そのコース内に、3期の研修講座を設定する。研修講座にどのようなコンテンツを掲載・配置するかは、現職教員及び教職大学院の現職教員学生に実施したアンケートを参考にし、山形県の教育現場の状況等も考慮して、「山形県教員指標に対応した英語教員研修 e ポートフォリオの構築」開発検討委員会での話し合いにより、決定する。

9月に第1期、10月第2期、11月に第3期の公開講座を開くことが考えられる。この際、特に、WebClass に実装されている「e ポートフォリオ・コンテンツ」等の機能を活用する。本研修システムの試行にあたっては、試行への参加希望者を、山形県教育委員会ならびに山形市小学校教育研究会外国語部会を通じて募集するとともに、英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会も独自に募集するなど、100名の規模で実施する。

試行に参加する現職教員には、まず、現職教員に各自の研修目的を明確に持ってもらう。すなわち、何を学びたいか、どんな問題を抱えているか、などである。その上で研修をスタートさせる。研修の中でわかったこと、気になったこと、わからなかったこと、逆に自分であればどうするか、などを研修の最中に、スマート・フォンやパソコンから、メモ的に記入したり、研修が

終わった帰りの電車の中や、自宅から書き込んだりすることにより、学習の履歴を記録する。その際、自分の学びの目的に附随する事柄や、同種の他の研修内容や、関連する文献を読んだことなど、自分の目的に関わることであれば、すべて書き込むこととする。それは、自らの授業での実践内容でも構わない。それらに対し、メンター役を担う教員・指導主事等は、その学習履歴を閲覧し、共有すると同時に、適宜、適切なアドバイスを WebClass のメール機能等を活用して、学習者である現職教員に送信し、学びが深まるようにサポートすることとする。

**B. 本調査研究の成果は、他教科の研修や一般的な教員研修にも転用・応用が可能であることを実証する**

今回の調査研究は、英語で実施するが、これは他教科ならびに他の教員研修においても効果がある可能性が非常に高い。よって、本調査の成果は容易に、他の教科や領域のモデルにもなる、と考えられる。

**C. 報告書の作成と、調査研究成果の報告会ならびに研究会（外部評価委員会）を開催**

質問紙調査（アンケート）結果を集計、分析し、本調査研究をまとめて委託事業成果報告書を作成する。報告書作成の際には、EBPM を進める観点から、関連する法令等に従い、個人情報の取扱いを適切に行いつつ、定量的かつ定性的なデータを収集し、検証することにより、調査研究成果を提示することとする。また、本研究調査の結果を報告する報告会ならびに研究会を開催する。その報告会には、外部有識者として福島大学人間発達文化学類人文科学コース・佐久間康之教授を招き、今回の取り組みに対し、コメントを寄せてもらい、それを外部評価とする。

## 第4節 本調査研究の具体的な実施体制・組織、連携体制

所属部署・職名	氏名	役割分担
学長	小山 清人	代表者
副学長	出口 毅	学外各機関・組織と連絡調整
地域教育文化学部		
学部長	大森 桂	研究統括
准教授	金子 淳	研修システム全体の 作成・分析・報告書作成
副学部長（学務担当）	三上 英司	学部内・連携先との連絡調整
副学部長	中西 正樹	情報システム関係の連絡調整
教授	佐藤 博晴	附属学校と連絡調整・報告書作成
教授	江間 史明	教育実践研究科と連絡調整
准教授	石崎 貴士	研修システムの 作成・分析・報告書作成
准教授	ジェリー・ミラー	英語監修・報告書作成
講師	三枝 和彦	研修システムの作成・分析・報告書 作成
企画部企画課		
主任	後藤 拓矢	事務連絡担当者

山形大学と山形県教育委員会が連携して、山形県の英語教員の研修システムの構築を合同で行う。制度設計や今後の実施に向けて協議し、山形県教育委員会の意見を十分に反映させる。本事業の連携担当を、

山形県教育委員会高校教育課主任指導主事の米野和徳主任指導主事と、  
山形県教育委員会義務教育課主任指導主事の高橋典子主任指導主事

に依頼する。なお、山形県で同じく教員養成に携わる

東北文教大学人間科学部子ども教育学科 山口常夫教授

にも、本事業に関わっていただくこととする。また、

山形県立谷地高等学校 小林英治教諭  
山形市立第三中学校 渡部貴敬教諭  
上山市立北中学校 半田智美教諭

にも、調査研究補助としてお手伝いをいただいた。

また、この事業は、山形大学と山形県教育委員会が連携して推進するが、さらに効果的に進めていくために、山形市小学校教育研究会外国語部会とも連携をした。その際には、

山形市小学校教育研究会外国語部会長  
山形市立西小学校 高橋守校長

にお力添えをいただいた。

文部科学省 令和元年度「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」  
課題名『山形県教員指標に対応した英語教員研修 e ポートフォリオの構築』

### 「英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会」

山形大学 学術研究院（主担当 地域教育文化学部 児童教育コース）副学部長 教授  
三上英司（委員長）

山形大学 学術研究院（主担当 地域教育文化学部 児童教育コース）准教授 金子淳

山形大学 学術研究院（主担当 地域教育文化学部 児童教育コース）准教授  
ジェリー・ミラー

山形大学 学術研究院（主担当 地域教育文化学部 児童教育コース）講師 三枝和彦

東北文教大学 人間科学部こども教育学科 教授 山口常夫

山形県教育庁高校教育課 主任指導主事 米野和徳

山形県教育庁義務教育課 主任指導主事 高橋典子

## 第5節 本調査研究の実際（活動日程）

- 7月 山形県教育委員会へ事業開始の説明を行う。  
学内各委員会に本事業開始の報告をする。  
質問紙調査の質問項目を検討し、質問紙を作成する。  
免許状更新講習の申込期間、該当する講習に本事業への協力を周知する。  
英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会規程を審議する。  
英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会（第1回）を開催する。
- 8月 質問紙調査を配布し、実施する。特に、免許状更新講習において個別にニーズ調査と受講後アンケートを実施する（同意が得られた場合のみ、データとして使用する）。  
現職教員院生に対する調査を実施する（同意が得られた場合のみ、データとして使用する）。  
質問紙を回収し、データを入力する。
- 9月 訪問調査について日程調整と訪問先へ依頼を行う。  
訪問調査（大阪教育大学、大阪府教育委員会）。  
データの集約と調査結果の分析を開始する。  
データの集約と調査結果の分析を終了する。  
英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会（第2回）を開催する。
- 10月 第一期 研修講座を開講する。  
第二期 研修講座を開講する。  
英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会（第3回）を開催する。
- 11月 第三期 研修講座を開講する。
- 12月 報告書の原稿執筆を依頼する。
- 1月 英語教員研修 e ポートフォリオ開発検討委員会（第4回）を開催する。
- 2月 調査研究成果の報告会（外部評価委員会・外部有識者会議）を開催し、研究成果の検証を行う。  
原稿をとりまとめる。入稿する。
- 3月 報告書の校正をする。  
報告書完成・送付する。  
事業完了

## 第6節 本調査研究事業の実績

### (1) 事業の実施日程

事業項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
・運営委員会					←							→
・外部視察						↔						
・事前実態調査					←	→						
・教育プログラムの開発					←	→						
・教育プログラムの実施							←	→				
・外部有識者会議											↔	
・研究成果の検証										←	→	

### (2) 事業の実績の説明

本事業は、山形大学と山形県教育委員会との連携によって実現したものである。7月末の事業採択正式決定後、8月初旬に山形大学と山形県教育委員会で山形大学に「英語教員研修eポートフォリオ開発検討委員会」（以下、運営委員会）を設立した。この運営委員会を事業内容に応じて適宜開催することによって研究活動の連絡および全体日程の調整等を行った。また、今回の研究の要となるLMS(Learning Management System)を開発・管理・運営する、日本データパシフィック社に本事業の説明を行い、了承を得た。

本事業の研究内容に関する先行研究視察として、9月に大阪府教育委員会ならびに大阪教育大学を視察した。本事業に関する実態調査として、主として山形県内の公立小学校・中学校・高等学校の教員を対象に、英語に関する教員研修の実態を把握するためのアンケート調査を実施した。その結果と、本県の英語教育の現状、ならびに来年度から小学校で英語が教科となる現状を踏まえ、英語に関心のある小学校教員、中・高の英語教員すべてが参加可能な本事業の教育プログラムを、山形県の教員指標に基づき、山形市小学校教育研究会外国語部会と連携した上で、「第二言語習得論を踏まえた指導法」、「英語学習開始時期と習得」、「小中連携と言語活動、評価」、「動機づけ」の4つテーマに限定して開発した。第一回目9月に「第二言語習得論を踏まえた指導法」（参加者数51名）、第二回目10月に「英語学習開始時期と習得」と「小中連携と言語活動、評価」（参加者数34名）、第三回目11月に「動機づけ」（参加者数46名）を実施した。

また、eポートフォリオ活用のさらなる可能性を探るべく、山形県教育委員会と連携し、認定講習で実施している「異文化理解」と「英米文学」の二回においても（参加者数16名）、本来の講習の性質を尊重した上で、限定的かつ試験的に実施

した。

このように、研修は9月中旬から始め、12月まで、5回の英語に関する教員研修会を実施した。参加者の総数は延べ147名であった。本事業で開発した教員研修プログラムの有効性を検証するための作業として、受講生を対象にアンケート調査を実施した。

さらに、本事業の成果について検証するため、外部有識者として福島大学人間発達文化学類人文科学コース・佐久間康之教授を招き、「外部有識者会議」を、2月に開催した。最終的に本事業の取り組みについて報告書としてまとめた。





## 第2章

# 英語教員研修 e ポートフォリオ 実施内容

## 第1節 第1回、第2回、第3回研修

第1回目研修 2019年9月18日（水）

令和元年9月4日

山形市内各小学校長 様  
山形大学附属各学校園長 様  
山形市内各県立特別支援学校長 様  
山形市小教研外国語部会員 様

山形市小学校教育研究会長 武田 徹  
山形市小学校教育研究会外国語部会長 高橋 守

## 令和元年度 第4回外国語部会について（ご案内）

初秋の候、みなさまにはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。  
さて、令和元年度外国語部会第4回研修会を下記により開催いたします。  
つきましては、多数ご参加いただきますようご案内申し上げます。

### 記

1. 日 時 令和元年9月18日（水）15時00分～17時00分  
（受付は14時40分～14時55分です。）
2. 場 所 山形市立千歳小学校（西小ではありません。ご注意ください。）  
山形市落合町1359番地 Tel 631-2164
3. 内 容

(1) 第一部 : <講 演> (15:05-16:35 90min)

①山形大学 地域教育文化学部 准教授 金子 淳 氏 (15:05-15:20 15min)

「これからの英語教員研修のあり方について

－英語教員研修におけるeポートフォリオの活用－

②宮城教育大学 教育学部 准教授 鈴木 渉 氏 (15:20-16:35 75min)

「言語活動としてのSmall Talkと学習評価」

（鈴木先生は、「We Can!」「Let's Try!」、来年度5、6年生が使用する教科書  
：「NEW HORIZON Elementary English Course」等の編集に携わった先生です。）

#### ポートフォリオの記入例

（個人名を記載していませんが、ご本人から掲載の許可をいただいております。  
校種は中学校です。）

今回の研修を受けるにあたって、調べてきたことを書いて下さい。

小学校の新学習指導要領・外国語を事前に読み、教職専門実習で実際に言語活動を意識した授業を数時間行った。実習時に、外国語専科の先生と単元、教材作りや中学校との連携についてなどについて話したことを通して、課題意識を持つことができていたため、今日の研修内容についても深く理解することができた。

今日の研修でわかったことを書いて下さい

- ・言語活動とは「英語を使用して互いの考えや気持ちを伝えあうこと」、つまりコミュニケーションそのものだということ。練習活動（リスニングの聞き取りや言語材料の理解など）を言語活動にするための tips. (教科書のキャラクターを活用しての Q&A などは、中学校でも使えるネタである。)
- ・子どもに対話の続け方について具体的に「めあて」を持たせ、年間を通してまんべんなく繰り返していくことの重要性。小中の接続にも活用できる。
- ・相手意識を持って対話をつづけようとする子どもを育てるため、思考を働かせる場面を与える工夫をする重要性。Small Talk も対話を継続させるために有効。
- ・鈴木先生のメルアドの書き取り！書くことを評価するためにアルファベットの A～Z まで書く…ではなく、「メールアドレスを聞き取って、書き取ってくれる？」という場面設定。書くことにもコミュニケーションを意識させる。
- ・中学校の先生方に、小学校の実際をもっと理解してもらう必要があります。知らないでいる人が多いはずですし、旧態依然の授業はできません。かなり、危険です。

今日の研修でわからなかったことを書いて下さい。

評価についてもう少し知りたかったです。スライドの後半部分に、振り返りシート（？）があったように思いましたので、気になりました。

その他、感想や要望などありましたら、書いて下さい。

ポートフォリオで自分の学びを蓄積すること、それがウェブ上で簡単にできることは、大変便利で教員の研修のアウトプットにもってこいだと思います。（復命書を作成して、校長印をもらって、などしていると、同僚に伝える暇もなくなります。）その日のうちに、できるだけ早く振り返ることができるよう、次に研修の機会があれば、パソコンを持参するのもいいのかもしれない。

## 『中村典生先生・バトラー後藤裕子先生』 講演会

10月27日(日) 13:00~17:00  
山形大学 人文社会学部 301 教室

13:00~ 13:10	【開会行事】金子淳(山形大学)
13:10~ 14:40	【講演】 講師：中村典生先生(長崎大学教授) 演題：学習指導要領全面実施の前に確認すべきこと -小中連携と言語活動、そして評価
14:50~ 16:20	講師：バトラー・後藤裕子先生(ペンシルバニア大学教授) 演題：英語習得の開始時期と習得について
16:30~ 17:00	【パネルディスカッション】 演題：小学校英語の教科化と日本の英語教育のこれから パネリスト：中村典生先生 バトラー・後藤裕子先生 山口常夫先生(東北文教大学教授) 司会進行：金子淳(山形大学准教授)

**入場料 無料**

**対象：小学校教員、中学校・高等学校英語科教員、英語教育関係者、大学生、大学院生**

**主催 山形大学地域教育文化学部「英語教員研修eポートフォリオ開発検討委員会」**

これは、山形大学地域教育文化学部が、文部科学省 令和元年度「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」に、課題名『山形県教員指標に対応した英語教員研修eポートフォリオの構築』で申請し、採択され、実施しているものです。

**【お問い合わせ】**

山形大学 地域教育文化学部 金子淳

✉ jun\_kaneko@e.yamagata-u.ac.jp または TEL : 023-628-4400

令和元年（2019年）10月17日

## 第3回 公開 英語教員研修（公開講座）を実施します

### 【本件のポイント】

- 山形大学地域教育文化学部が、文部科学省「令和元年度教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」に採択されました。
- 本事業の一部として、県内の小学校、中学校・高等学校教員（英語）および小学校、中学校・高等学校教員免許状（英語）取得を目指す学生を対象に、英語の授業力を向上させるための教育研修（講座）を実施することとしました。
- 第3回目の英語教育研修（公開講座）を令和元年10月27日（日）に山形大学で開催します。

### 【概要】

文部科学省委託事業「令和元年度 教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」に山形大学地域教育文化学部が申請した「山形県教員指標に対応した英語教員研修 eポートフォリオの構築」が採択されました。

本事業の一部として、県内の小学校、中学校・高等学校（英語）教員および小学校教員免許状、中学校・高等学校教員免許状（英語）取得を目指す学生を対象に、英語授業力を向上させるための英語教員研修（公開講座）を実施することとしました。

第3回の英語教育研修（公開講座）を下記のとおり開催します。講師に長崎大学から中村典生教授、ペンシルヴァニア大学からバトラー後藤裕子教授をお招きし、学校英語、中学校・高等学校の英語の授業力向上に関する講演会を開催します。

研修（公開講座）を通して、参加者の小学校・中学校・高等学校の英語授業を改善するために必要な資質・能力を身に付けることを目指します。

### 【講座内容】

実施日時：令和元年10月27日（日）13時～17時  
実施場所：山形大学小白川キャンパス 人文社会科学部1号館 301教室  
講師：長崎大学・中村典生教授、ペンシルヴァニア大学・バトラー後藤裕子教授  
講演内容：「英語習得の開始時期と習得について」等、小学校英語、中学校・高等学校の英語の授業力向上に関する内容をお話いただき、eポートフォリオを活用して、研修の学びを深める。  
対象：小学校教員、中学校・高等学校（英語）教員  
小学校教員・中学校・高等学校（英語）教員を目指す学生  
英語教育研究者

【申込方法など】 参加費は無料です。下記アドレス宛にメールでお申し込みください。

### ※用語解説

eポートフォリオ：児童生徒の学習の成果、そしてそこに至るまでの過程に関する記録を集めた電子ファイルのこと。

お問い合わせ  
学術研究院 准教授 金子淳（英語教育学／地域教育文化学部主担当）  
TEL 023-628-4400 メール jun\_kaneko@e.yamagata-u.ac.jp

# バトラー先生の学習科学からのヒント

## － 英語教師のアポリアを緩和する要素とは －

山形県立谷地高等学校 教諭 小林 英治

授業評価アンケートを実施すると数名の生徒がコメント欄に「英語はなにもわからない」、「英語は面白くない」と書いてくる。読むたびに心が痛む。このクラスには今年、実用英語技能検定準1級、2級を取得して意欲的に学ぶ生徒と英語が苦手な生徒が混在している。文部科学省が推進する「高校生のための学びの基礎診断」を実施すると、学習に躓いている生徒は義務教育で習得しておくべきことの4割程度しか理解していないと診断された。

意欲的な生徒は学習ツールや学習法を授業で示し、演習を積むと容易に自律的な学習者に成長する。しかし、そうではない生徒は受動的な学習者の殻から抜け出すことができなくて苦しんでいる。学校では留学セミナーや海外へ研修などを実施して生徒の学習意欲を刺激してきたが、授業では生徒の大きな変容は未だ見られない。

生徒はいつから英語が苦手なのか。本格的に始まった小学校英語教育で近い将来、高校に英語好きな生徒が増えるのか。授業では目を輝かせている生徒と目を曇らせている生徒がいて、私はそれらの生徒を交互に見ながら今やっているタスクを続けるべきかあるいは今すぐに切り上げて違うタスクをすべきかと思い悩む日々が続く。

教室には自らの過去の学習経験を振り返り英語学習のスタートが遅れたと悔やんでる生徒がいる。しかし、バトラー先生は言語学習には臨界期はないかもしれないと話されていた。学ぶ必要が出てきたときこそ精一杯語学の学習を始めればいいのか。加えて、先生は臨界期の説明の過程で、Fløgeの言語習得開始年齢の分析に触れた。言語習得開始年齢を特定するためには複数の要因が複雑に絡まった変数の中に「母語の熟達度」があるという。このことを聞いた時、東口ボくんプロジェクトの新井紀子先生の講演をふと思い出した。新井先生はワークショップを通じて高校生がいかにか小学校の教科書を正確に読めないかを聴衆に実感させた。日本語を読めない生徒は当然英語も読めない。この講演の記憶とバトラー先生の母語の熟達度のお話から、国語（母語）学習と外国語学習には大きな相関があることを再認識した。高校生が英語を習得する際は国語学習も大いに奨励しなければいけない。

また、バトラー先生は「外国語早期学習開始者は、動機づけが高い」と年少者からの外国語教育の効用を話された。このことで小学校英語教育が高校生の英語学習の動機付けに少なからず影響するものと期待できる。一方で外国語早期学習は「早ければ早いほど良いわけではない」と商業化した過熱気味の幼児英語教育に警鐘を鳴らした。格差社会における富裕層だけが英語を優位に学習できるという不安は検証データを示しながら払しょく下された。

バトラー先生は講演会当日会場前で Musio X に根気強く英語で話しかけられていた。Musio X が応答した音声を談話分析するかのように何度も質問の仕方を変えて質問された。先生は早期英語学習について大切なことの中に「テクノロジーの活用」を挙げている。現在の COVID-19 騒動の影響で全国の学校が一斉休校となり、皮肉なことに長期に亘って家庭学習を強いられる生徒たちは ICT を活用した学習と向き合う機会を得た。一斉講義式の授業で受動的な学びに晒されている生徒たちが、ICT 機器や AI 搭載の学習機器を活用しながら学びと静かに向き合い、電子媒体とやり取りしながら少しでもアクティブで自律的な英語学習者に近づくことを期待したい。



第3回目研修 2019年11月13日(水)

## 『野呂徳治先生』講演会

日時：11月13日(水) 15時40分から16時40分

場所：山形市立第五小学校

〒990-0034 山形市東原町1-1-9

TEL 023-622-0655 FAX023-633-9331

講師：野呂徳治先生(弘前大学教授)

演題：「小学校英語における動機づけ」

参加費：無料

対象：小学校教員、中学校・高等学校英語科教員、英語教育関係者、大学生、大学院生

主催：山形大学 地域教育文化学部 「英語教員研修 eポートフォリオ開発検討委員会」

(これは、山形大学地域教育文化学部が、文部科学省 令和元年度「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」に、課題名『山形県教員指標に対応した英語教員研修 eポートフォリオの構築』で申請し、採択され、実施しているものです)

### 【お問い合わせ】

山形大学 地域教育文化学部 金子淳

jun\_kaneko@e.yamagata-u.ac.jp または TEL : 023-628-4400

14:30~15:15 (45) 授業

15:25~15:40 (15) 金子准教授の講話

15:40~16:40 (60) 野呂教授のご講演

16:40~16:55 (15) 市教委田中指導主事から授業のご指導

17:00 閉会

第3回目研修 2019年11月13日（水）の際、参加者にアンケートを実施した。  
内容については、第3章に記載する。

## どうやって小学生を英語学習に立ち向かわせるか

山形大学地域教育文化学部 三枝和彦

ここでは、弘前大学教授で東北英語教育学会会長、野呂徳治先生による講演、「小学校英語における動機づけ」について報告する。本講演は、山形市小学校教育研究会外国語部会との共催で、第5回研修会事後研の一部として行われた。事後研には授業参観に引き続いて数多くの先生方が出席し、野呂先生のお話に熱心に耳を傾けた。

ご講演では、外国語学習の成否及び学習の継続性にもっとも強い影響を与えるのは動機づけであり、小学校外国語・外国語活動でも子どもたちの英語学習に対する動機づけを考



える必要があるとして、まず国内外の研究書からの引用を交えて動機づけの理論が、続いて第二言語習得のための動機づけの理論が説明され、それらを踏まえて、小学生の動機づけをどのように進めていったらよいのかについて、詳細かつ示唆に富むお話をしていただいた。以下にその概要を記す。

\*\*\*\*\*

3年生で英語を学び始める子どもたちには、英語・英語学習に対する期待と不安があるはずで、英語学習に対する動機づけを高めるには、その期待を膨らませ、不安を解消することが肝要である。その不安を取り除こうとするためか、これまでの小学校外国語活動・外国語の授業では、クイズやゲームで勝敗を競い、その楽しさから学習に誘う、「道具的動機づけ」が多用される場面が多いように見える。しかし、外国語および外国語学習に高い関心と意欲をもって自ら学習に取り組もうとする自律的な学習者に子どもたちを育てていくには、英語や英語圏の文化に対する興味・関心や憧れから学習に向かっようとする、「統合的動機づけ」へ段階的に移行していかななくてはならない。そのためには子どもたちが日本語と英語の違いを認識し、言葉の面白さを感じると同時に、英語や英語圏の文化に惹きつけられるような体験をする必要がある。

また、自己決定理論に基づいて言えば、クイズやゲームでの正解や勝利を得たいという外発的な理由から英語学習に向かうのではなく、英語を学習すること自体に興味・関心を持ち、喜びを感じるがために英語学習へ向かうという、内発的動機づけ、すなわち自己決定性の高い動機づけを形成していくべきである。そのためには、自発的な興味や選択に基づいて行動したいという自律性への欲求や、行動を遂行する自信や能力を顕示したいとい

う有能感への欲求、ならびに周囲と密接な関係を持って友好的な連帯感を持ちたいという関係性への欲求を充足させようとする心の動きを生み出すことが必要になってくる。それを実現するために、具体的にはペアワークやグループワークを通して子どもたちが互いに友好的な人間関係を作り出せるようにしたり、明確な学習目標を示し、途中で挫折することなく段階的に学習を進められるような学習活動を設計したり、学習の振り返りを通して、子どもたちに自ら目標の設定や評価を経験させることによって、学習の自律性を高めたりすることが大切である。さらに、英語学習に取り組み始めた自らの姿と、英語学習を通して自分になり得る姿—自分がこうなりたいという理想の姿と、周囲の人々からの期待を感じ取り、こうあるべきだと自らに課す義務としての姿—を思い描くことによって、英語学習に対する動機づけを高めることができる。例えば「将来の夢」をテーマとした授業において自分の夢を発表させることで、理想的な自己を具体化し、英語学習と関連付けることができるかもしれない。また、子どもたちにとって過重な負担とならない適度な期待をかけることによって、期待に応えたい、もしくは期待を裏切りたくないという子どもたちの動機づけを引き出すことができるかもしれない。

\*\*\*\*\*

外国語・外国語活動の現場では、子どもたちを英語学習に向かわせるべく、多くの先生方が頭を悩ませ、様々な工夫を凝らして授業に取り組んでいらっしゃるが、そのさなかでは理論を顧みる時間はあまり取れないのではないだろうか。本講演で動機づけの理論を丁寧に説明していただいたことで、日々の取り組みを振り返り、より効果的な授業を展開するための手がかりを得られたのではないかと思われる。

英語が教科として小学校で教えられるようになって、動機づけはいっそう繊細な問題になっているように思われる。学習者の年齢が高くなれば、なぜ英語を学習する必要があるのか具体的に考えられるようになるだろうし、知性が成熟するにつれて言語それ自体や文化的な側面についても興味・関心を抱くことができるようになっていくだろう。そのために様々な情報を提供したり、教師が明示的に説明したりすることもできる。しかし、小学生に対してはそのようにはいかないし、昨今の教育現場では制約も多い。子どもたちを英語・英語学習に向かわせるのは容易ではないだろうが、子どもたちが英語と英語学習の必要性を自分でしっかりと考えられるようになったときに、既に英語嫌いになってしまっていたという事態を避けるためにも、外国語・外国語学習における動機づけが非常に大切なのではないだろうか。

講演を聴いていて興味深いと思ったことにもうひとつ触れておきたい。英語学習への動機づけにおける子どもたちの「快」、「不快」ということである。「快」とは、英語や英語学習へ興味を持ったり、学習中に成功体験を得て、自信を深めたり、ということであり、「不快」とは、授業を理解できなかつたり、何をしてよいか分からず不安になつたり、活動で失敗して自信を喪失してしまつたりすることだ。教師はこの「不快」の要因をできるだけ排除しようとするものだが、その姿勢に疑問が提起された。つまり、「不快」を避けるのではなく、



克服するような授業を展開すべきだというのだ。その通りだろう。いつまでも容易に理解できる程度のことしか触れずには語学力の向上は望めないし、英語を使用する現場において失敗はつきものだから、学習中に体験していなくては、そのような状況に実際に置かれた場合に対応することができない。また、自ら「不快」を乗り越えていけるようではなくては、自律した学習者になることもできない。もちろん、失敗によって英語と英語学習への意欲を一気に喪失してしまうようなことになってはいけませんが、困難な状況に耐えられるような、失敗しても立ち直れるような力を育てていかなければならない。そのためには安心して失敗できる環境が必要であり、それを可能にするような教室づくりが不可欠になってくるのだ。

## 第2節 認定講習 傾向と分析

eポートフォリオの可能性をさらに探るべく、山形県教育委員会と連携し、認定講習の「異文化理解」と「英米文学」においても、その講習の本質を踏まえ、講習の本来の内容とあり方を損ねない範囲で、eポートフォリオを活用した。ここでは、そのうち、特に「英米文学」で実施した結果と成果について記述する。

### 認定講習 英米文学

eポートフォリオへの記載内容を、テキストマイニングで分析し、以下にまとめる。受講者が記載した課題項目は以下になる。

#### 1日目

1. 今日の授業内容について、どれくらい、自分で準備をしてきましたか？
2. 今日の授業内容について、何を、準備をしてきましたか？
3. 今日の授業を受けて、わかったことを書いて下さい。
4. 今日の授業を受けて、わからなかったことを書いて下さい。そして、そのわからなかったことを、わかるようになるために、どのようなことを考えたりしたか、書いて下さい。
5. 感想、要望、その他、自由に書いて下さい。

#### 2日目

1. 前回の授業の後、前回の授業内容に関して、どれくらい勉強しましたか。
2. 前回の授業の後、前回の授業内容に関して、何を勉強しましたか。
3. 今日の授業内容について、どれくらい、自分で準備をしてきましたか？
4. 今日の授業内容について、何を、準備をしてきましたか？
5. 今日の授業を受けて、わかったことを書いて下さい。
6. 今日の授業を受けて、わからなかったことを書いて下さい。そして、そのわからなかったことを、わかるようになるために、どのようなことを考えたりしたか、書いて下さい。
7. 感想、要望、その他、自由に書いて下さい。

上記の質問項目への回答として記述された文章をすべて記載することは不可能なので、その内容の要点を記述する。その際、テキストマイニング（多変量解析に基づく計量テキスト分析）を行い、記述された内容の傾向を探り、分析を施すこととする。

これまでは、アンケート等の自由記述を分析する場合、コーディングを施すのが通例

であった。しかし、その際、分析者の恣意もしくは主観的な要素が混入してしまうことを避けることは難しかった。それゆえ、客観性を担保するため、**テキストマイニングすなわち計量テキスト分析の統計的手法**を使うこととした。

具体的には、日本語テキスト型データを分析するためのツールとして、社会調査などで広く用いられている「KH Corder」(Version: 3.Alpha.17g)を使う。KH Coderとは、「テキスト型(文章型)データを統計的に分析するためのフリーソフトウェア」であり、「アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事など、さまざまな社会調査データを分析するために制作」されたものである(樋口耕一「KH Coder」<http://kncoder.net>)。またRはversion: 3.1.0を使用した。KH Coderには様々な機能があるが、ここでは「共起ネットワーク」を用いた。共起ネットワークとは、「抽出語またはコードを用いて、出現パターンの似通ったものを線で結んだ図、すなわち共起関係を線(edge)で表したネットワークを描く機能」であり、「ネットワーク分析で言う「中心性」にもとづいて色分けを」行うこともでき、「多次元尺度法(MDS)とは異なり、布置された位置よりも、線で結ばれているかどうかということに意味」がある。「単に近くに布置されているだけで線で結ばれていなければ、共起の程度が強いことを意味」しない(樋口耕一「Rを用いた多変量解析と可視化 共起ネットワーク」

[http://kncoder.net/scr\\_r.html#netg](http://kncoder.net/scr_r.html#netg))。

まず、データの前処理をした後、出現語を頻度順に表でまとめ、それを図として、可視化した。次に、「共起ネットワーク図(外部変数なし)」を描画させた。ネットワーク図において、中心となる言葉を探るため、中心性の図を描き、他の変数との関係性を明らかにするため、**外部変数**を読み込み、表示する設定にして、共起ネットワークを描画した。なお、外部変数については、KH Coder 開発者の解説を引用しておく。

#### ・外部変数

樋口耕一 KH Coder FAQ Index 外部変数について 外部変数とは何ですか?  
<http://kncoder.net/FAQ.html#ov1>

KH Coder では、テキスト型データに含まれていない情報を「外部変数」として読み込み、検索やコーディングのための条件として利用することができます。例えば新聞記事を分析する場合であれば、新聞記事が掲載された日付や、掲載された面などを、外部変数として読み込むことが考えられます。また、アンケート調査の自由回答項目を分析する場合は、性別・年齢・職業・学歴など(の通常の質問項目)を外部変数として読み込むと良いでしょう。いったん外部変数を読み込めば、例えば、男性の回答中に特に多くあらわれる言葉のリストを表示したり、「男性の回答中に単語 A が出現していれば」といった条件での検索・コーディングを行うことができます。また、コーディング(数え上げ)の結果を、男女別に集計することもできます。(原文ママ)

さらに、他との変数間との関係性を探るため、「多重対応分析」を行った。また、「共起ネットワーク」とは別のアルゴリズムで、コーディングを行うことを目的として、「階層的クラスタ分析」を行った。

Database Stats	
総抽出語数（使用）：	3,214 (1,227)
異なり語数（使用）：	615 (458)
	集計単位 ケース数
文書の単純集計：	文 157
	段落 71
	H5 47

図1. 基本データ

1	思う	動詞	40
2	英語	名詞	32
3	文学	名詞	22
4	読む	動詞	21
5	感じる	動詞	20
6	アメリカ	地名	16
7	自分	名詞	16
8	知る	動詞	16
9	分かる	動詞	15
10	映画	名詞	14
11	学ぶ	動詞	14
12	英文	名詞	11
13	楽しい	形容詞	11
14	教える	動詞	11
15	考える	動詞	10
16	背景	名詞	10
17	作品	名詞	9
18	大変	形容動詞	9
19	ありがとう	感動詞	8
20	エデン	名詞	8

図2. 出現頻度数

表1. 出現頻度数

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1 思う	40	21 考え方	8
2 英語	32	22 東	8
3 文学	22	23 子供	7
4 読む	21	24 生まれる	7
5 感じる	20	25 知識	7
6 アメリカ	16	26 特に	7
7 自分	16	27 表現	7
8 知る	16	28 文化	7
9 分かる	15	29 時間	6
10 映画	14	30 触れる	6
11 学ぶ	14	31 捉える	6
12 英文	11	32 必要	6
13 楽しい	11	33 勉強	6
14 教える	11	34 様々	6
15 考える	10	35 イメージ	5
16 背景	10	36 覚える	5
17 作品	9	37 興味	5
18 大変	9	38 今	5
19 ありがとう	8	39 作家	5
20 エデン	8	40 持つ	5

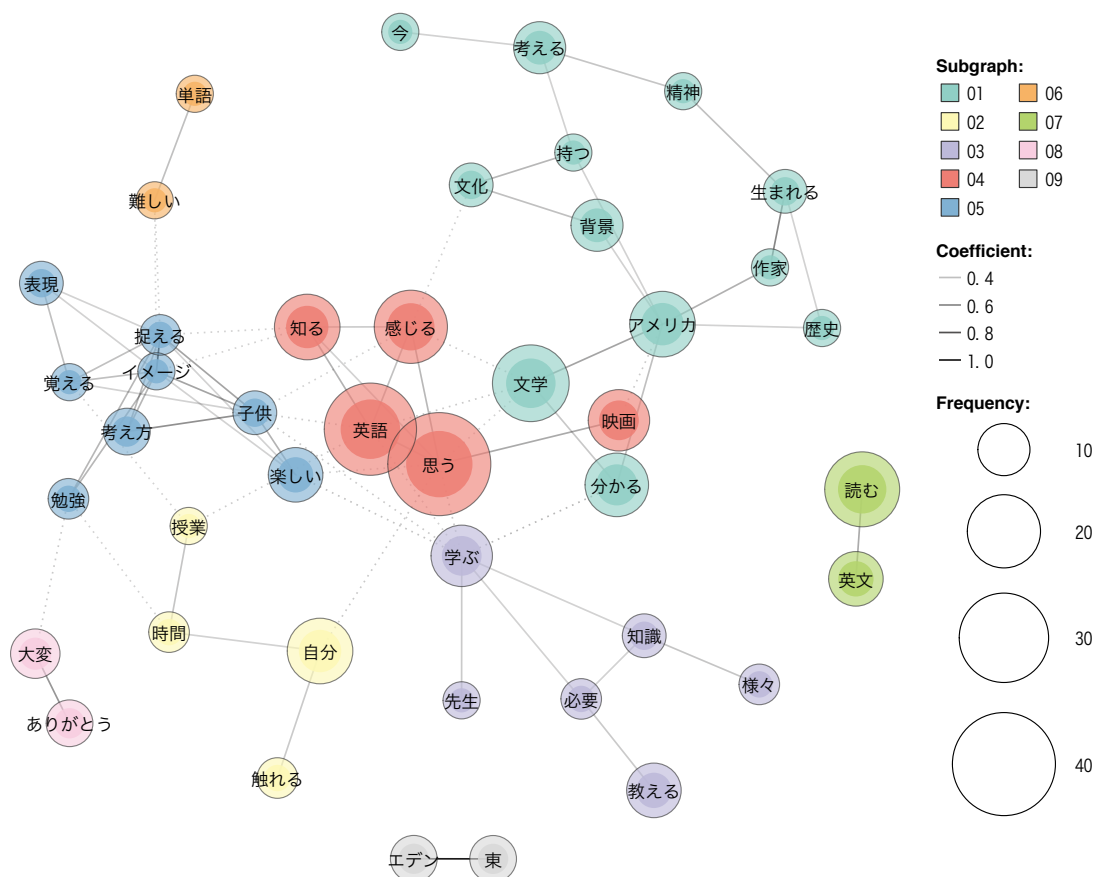
## 傾向

頻出単語の上位に並ぶのは、1「思う」、2「英語」、3「文学」、4「読む」、5「感じる」となっている。これは、英米文学に関する講習であるがゆえ、順当であるように思われる。

他には、6「アメリカ」「自分」「知る」、9「分かる」、10「映画」「学ぶ」、さらに、12「英文」「楽しい」「教える」、15「考える」「背景」、17「作品」は、そして、18「大変」、19「ありがとう」「エデン」となっている。



共起ネットワーク 図3.



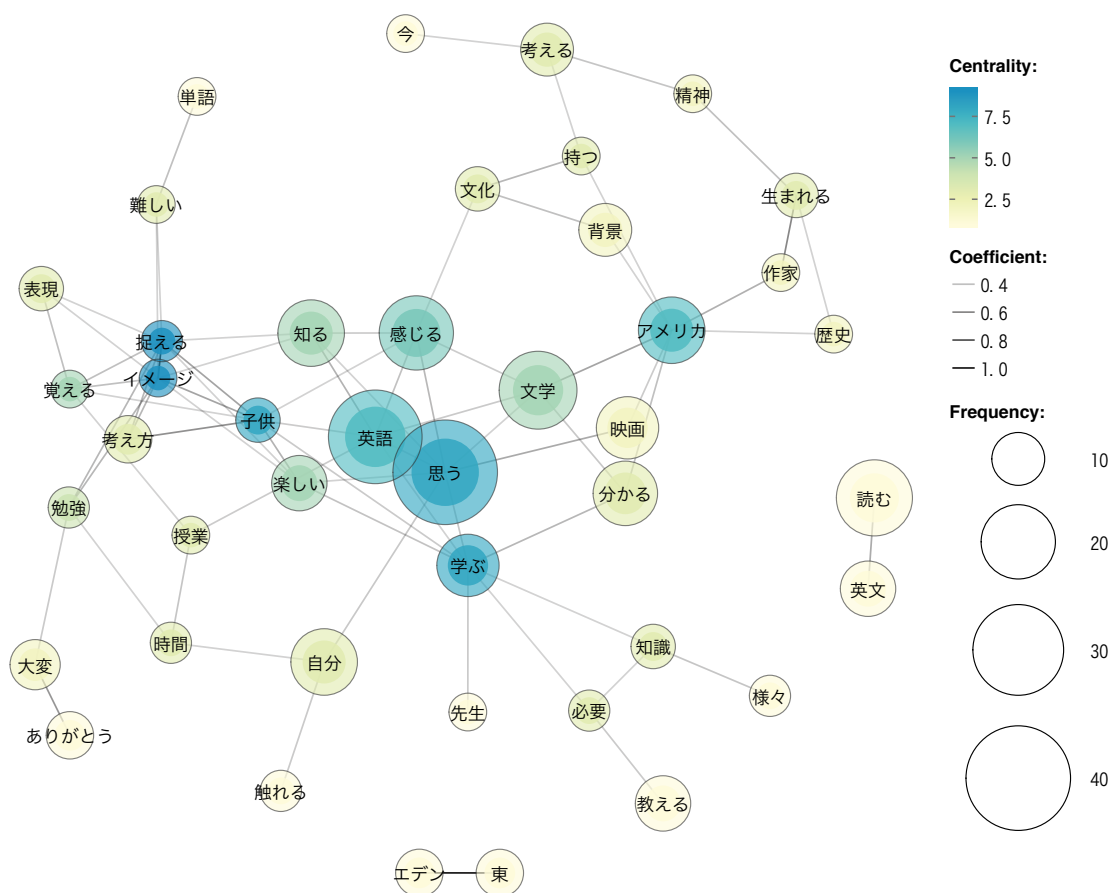
### 傾向と分析

中央の赤色のグループは「英語」「感じる」「知る」「思う」「映画」であり、「英語について映画などを通じて知る」という意味を表していると思われる。次に、中央左の青色のグループは「イメージ」「捉える」「覚える」「表現」「子供」「楽しい」「勉強」であり、「英語についてはイメージで捉えて覚える勉強を、子供に楽しく」教えたいという意味を表していると考えられる。右上の水色のグループは「アメリカ」「文学」「分かる」「文化」「背景」「作家」「生まれる」「歴史」であり、「アメリカ文学・文化、作家など背景や歴史が分かった」という意味を示している。中央右下の紫色のグループは「先生」「学ぶ」「様々」「知識」「必要」「教える」であり、「先生が、教えるには、様々な知識が必要である」という意味であるように思われる。右側の緑色のグループ「英文」「読む」から、「英文を読む」を示している。中央下の灰色のグループ「エデン」「東」で、「エデンの東」という取り上げた作品名を意味している。一方、左上の橙色のグループは「単語」「難しい」で、授業で扱った英文の「単語が難しい」ことを意味している。

全体的には、純粋に英語に向き合い、英文の作品に向き合い、難しいながらも、アメリカの文化や背景・歴史を学んだことを読み取ることができる。



共起ネットワーク 次数中心性 図4.



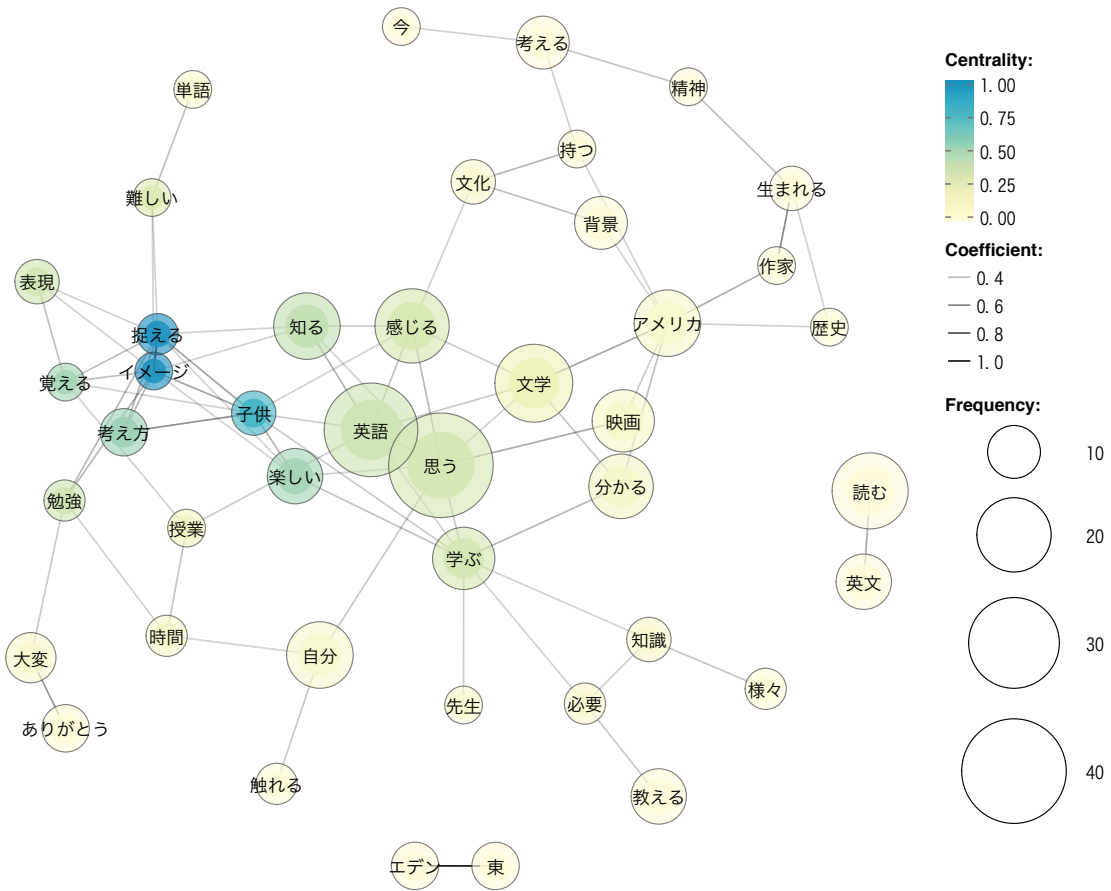
## 傾向と分析

次数中心性は、他の単語と多くつながっている単語ほど重要である、という考え方である。その観点から見た場合、「捉える」「イメージ」「子供」の色が最も濃い。これは、これらの言葉が、他の言葉と最も多く繋がっている単語であることを示している。これは、授業の中で、英語を「子供」たちに教える際に、単に意味で教えるのではなく、「イメージ」で「捉える」ような感覚を教えた方がいいですよ、と話したことに、受講者は、最も関心を持ったことを意味している。

次に色が濃かったのは、「英語」「思う」「アメリカ」「学ぶ」である。これは、次に、受講者に印象深かったのは、「英語」や「アメリカ」について「学び」、いろいろ考えたり、「思う」ことがあった、という意味を示していると思われる。

ここからは、英語の学び方について、自分が学生時代に教わってきた、従来の文法訳読のように「英語」から「日本語」、もしくは「日本語」から「英語」のように、訳したり、覚えたりする方法で英語を学ぶ方法ではなく、ネイティブのような感覚で、イメージで物事を捉え、英語で考え、そして英語で話す、という学び方、教え方が新鮮に感じられたのだと思われる。また、普段、学校で勤務している忙しさにより、学びたくても学ぶ機会がなかなかない中、今回の講習の機会に、英語について学ぶ機会があり、とても楽しく学ぶことができたという、学ぶ喜びも示していると思われる。

共起ネットワーク 固有ベクトル中心性 図5.

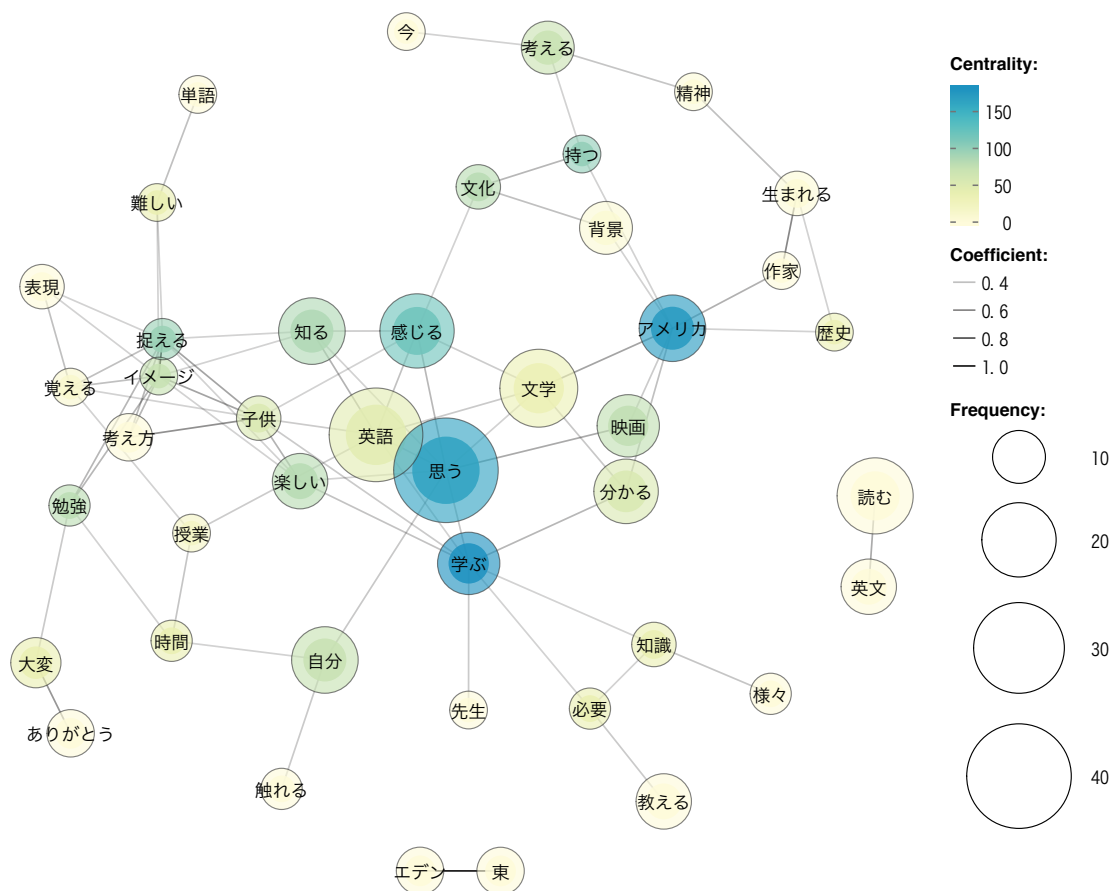


傾向と分析

固有ベクトル中心性は、多くの単語と繋がっている単語に、繋がっている単語が重要である、という考え方である。その場合も、中心となる単語は「イメージ」と「捉える」であり、「子供」である。授業の中で、英語を「子供」たちに教える際には、単に意味で教えるのではなく、「イメージ」で「捉える」ように、という感じで、教えた方がいいですよ、と話したことに、受講者は、最も関心を持ったことを意味している。

次数中心性の場合と同じく、ここも、英語の学び方について、自分が学生時代に教わってきた、従来の文法訳読のように「英語」から「日本語」もしくは「日本語」から「英語」のように、訳したり、覚えたりする方法で英語を学ぶのではなく、ネイティブのように、イメージで物事を捉え、英語で考え、そして英語で話す、という学び方、教え方が新鮮に感じられたのだと思われる。それゆえ、上記の言葉が中心的な意味を持ったのだと思われる。

共起ネットワーク 媒介中心性 図6.

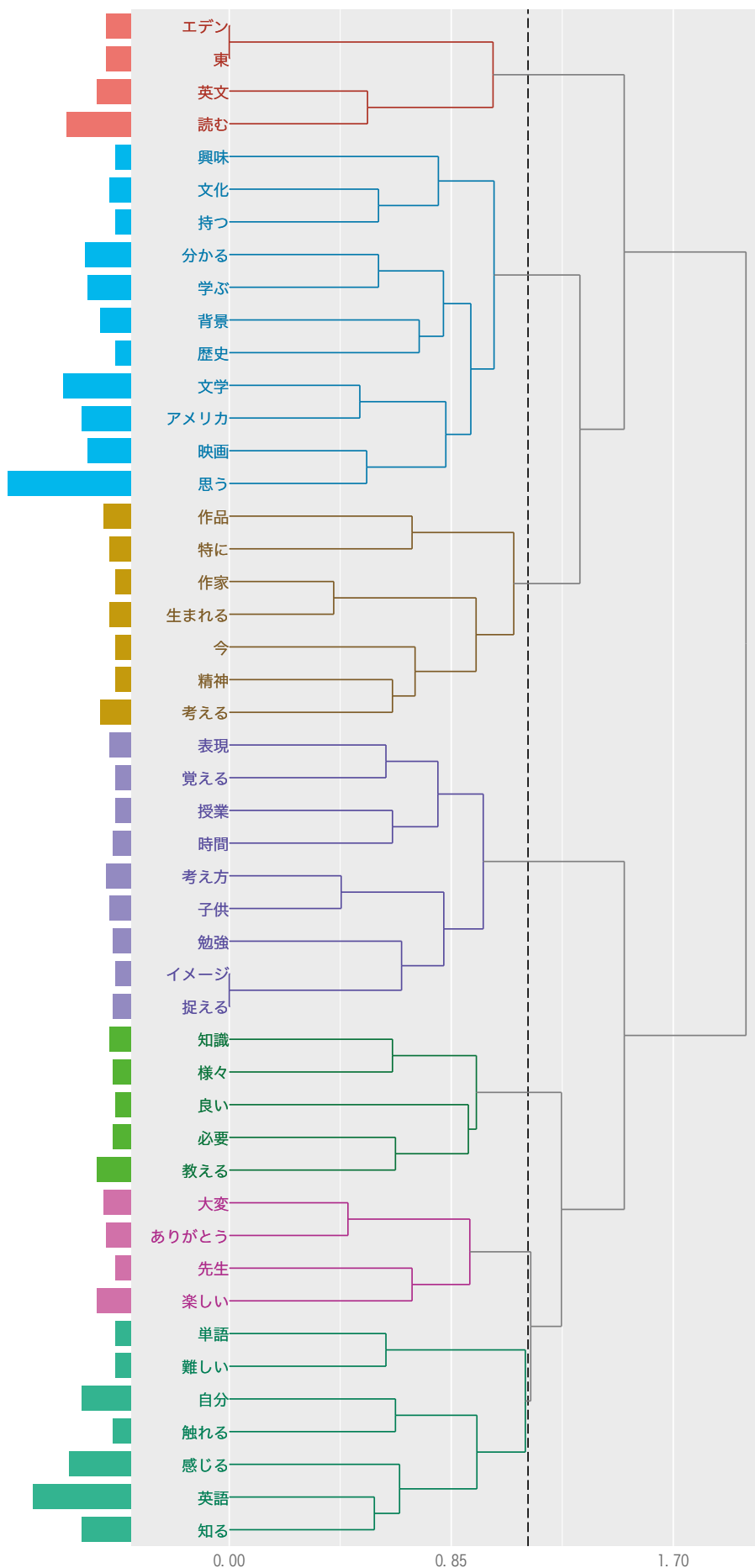


### 傾向と分析

媒介中心性は、ネットワークを繋げている単語が重要である、という考え方である。その場合は、「アメリカ」「思う」「学ぶ」の色が最も濃いことがわかる。この共起ネットワークは、いくつかのサブグラフから形成されているが、それらをこの「アメリカ」、「思う」、「学ぶ」という単語がつないでいることを示している。

「アメリカ」は「作家」「歴史」「背景」というサブグラフと、「文学」「映画」「分かる」というサブグラフを媒介し、つないでる。「思う」は「英語」「楽しい」「文学」のサブグラフと、「学ぶ」とそれに連なるサブグラフを連結している。「学ぶ」という単語は、「先生」や、「必要」「知識」「教える」などの単語を「思う」のサブグラフに繋いでいることがわかる。

階層的クラスタ分析 図7.



(赤色のクラスター)「エデン」の「東」の「英文」を「読」んだということを示している。

(青色のクラスター)「アメリカ」「文学」を「映画」を通じて「思う」ことがあり、「文化」に「興味」を「持ち」、「歴史」や「背景」を「学」び「分か」ったという意味を示している。

(金色のクラスター)「作家」の「生まれ」や「精神」を「考える」ことを特に「作品」から読み取ったという内容であると思われる。

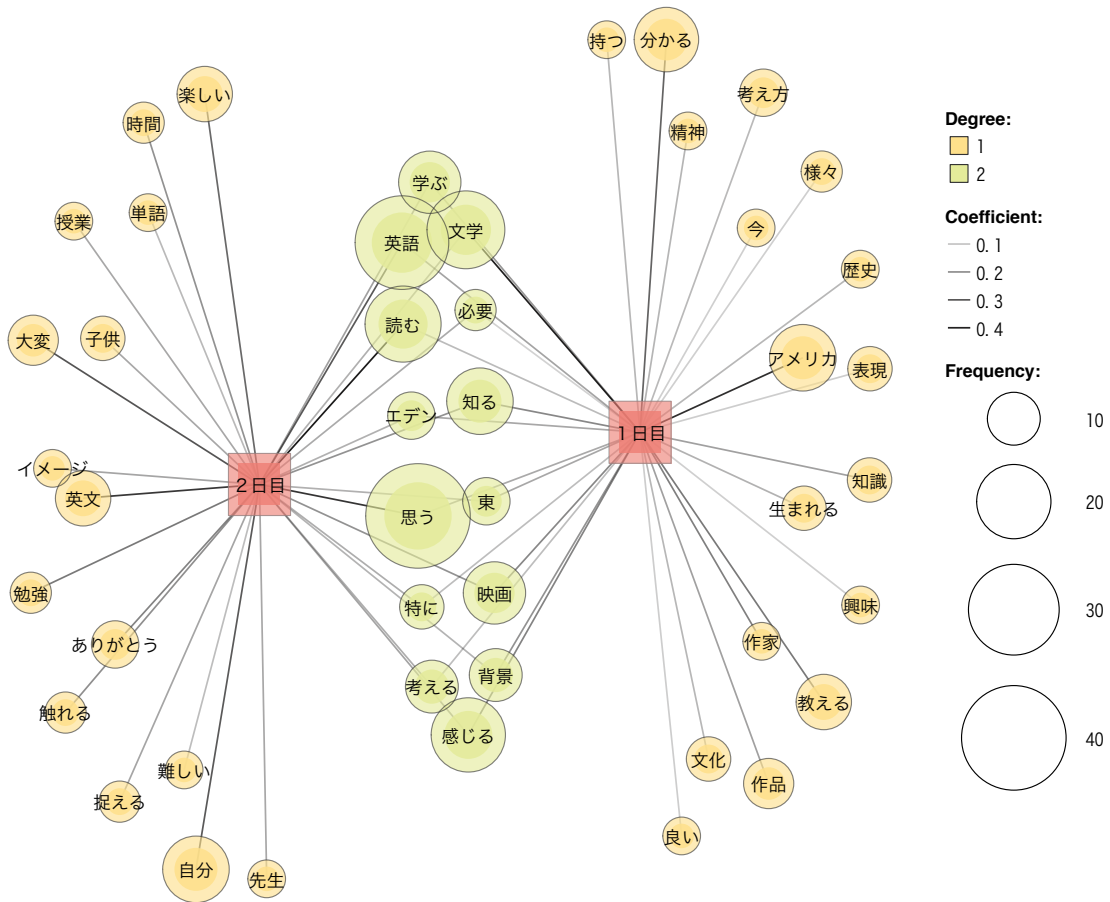
(紫色のクラスター)「イメージ」で「捉える」「勉強」の「考え方」を「子供」に「授業」「時間」に「表現」し「覚える」ようにさせるという意味であるように思われる。

(緑色のクラスター)「様々」な「知識」を「教える」「必要」があるという意味である。

(ピンク色のクラスター)「楽しい」講義をしていただき「先生」「大変」「ありがとう」ございました、という意味であると思われる。

(黄緑色のクラスター) 英文文学作品の中で使用されている「単語」は「難しい」が、「自分」で「触れ」、「英語」を「知」り「感じる」ことの重要性を意味していると思われる。

共起ネットワーク 外部変数 1日目と2日目 図8.



### 傾向と分析

この講習は1日目と2日目の二日間で行われた。この図からは、1日目に、受講生が書き込んだ文章と、2日目に書き込んだ文章の違いを示している。

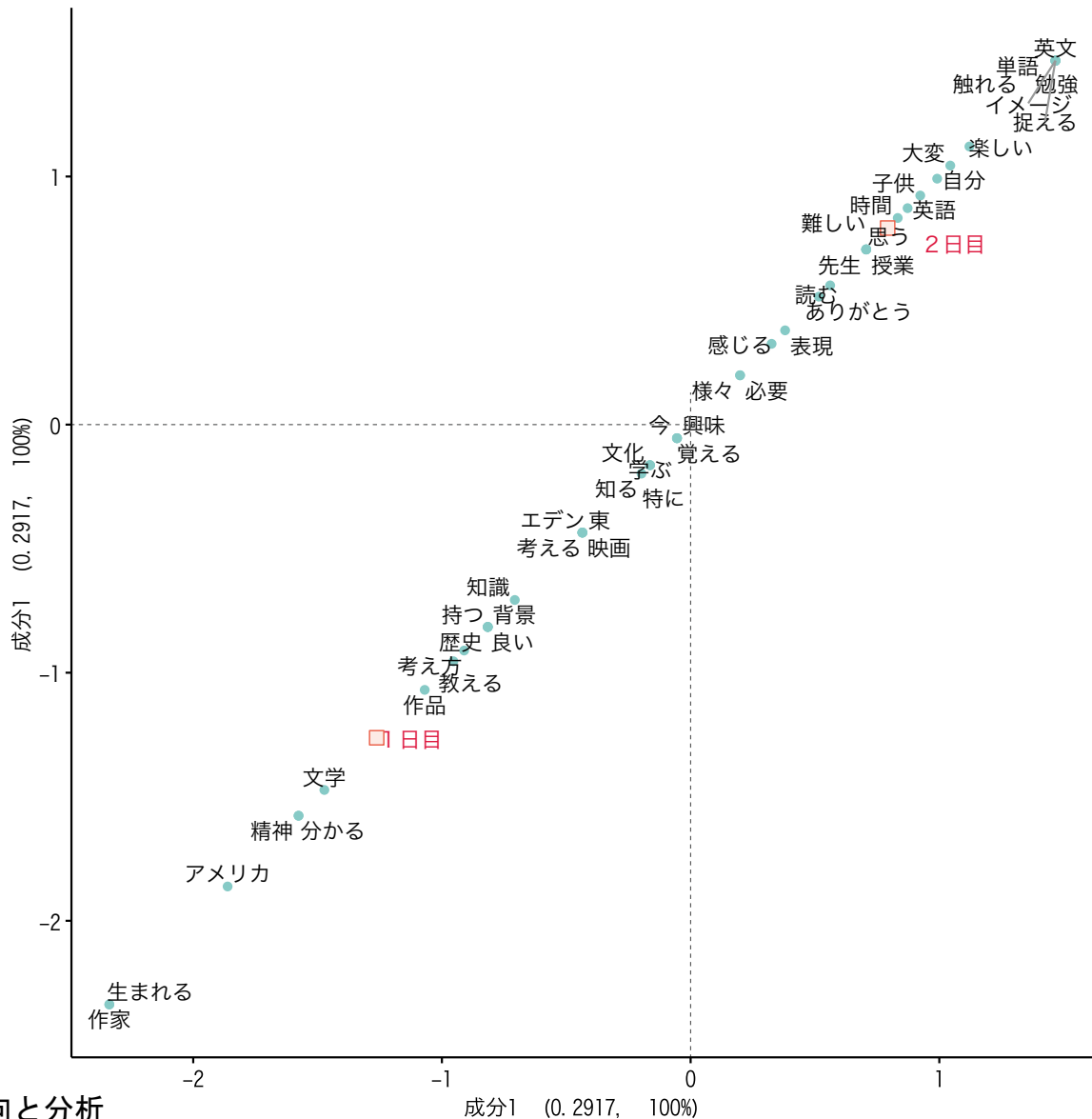
右側の橙色の単語は、1日目に書き込まれた文章に、主に出現した単語である。左側の橙色の単語は、2日目に書き込まれた文章に、主に出現した単語である。中央の黄緑色の単語は、1日目と2日目の両日に書き込まれた文章に出現した単語である。

出現頻度の高い単語を中心に見ていくと、1日目では「アメリカ」「教える」「分かる」「作品」「文化」「作家」となっている。2日目では、「自分」「楽しい」「ありがとう」「難しい」などとなっている。

1日目は、どのように子供たちに「教える」かを考えながら、「アメリカ」の「文化」や「作家」や「作品」を学び「分かった」ことがわかる。

2日目は、「自分」で「英文」に触れたりすることは「難しい」ことであったが、「楽しい」ものであり、「ありがとう」と講師に感謝の言葉を述べていると考えられる。

多重対応分析 1日目と2日目 図9.



傾向と分析

この図も、2日間で行われた講習のうち、1日目に、受講生が書き込んだ文章と、2日目に書き込んだ文章の違いを示している。ただし、上記の「共起ネットワーク」とは、数学的アルゴリズムが異なり、対応分析をベースにしている。

左下の方に赤字で「1日目」とある。左下に位置する単語ほど、「1日目」に書き込まれた文章に出現したことを示しており、右上の方に赤字で「2日目」とある。右上に位置しているほど、「2日目」に書き込まれた文章に出現した単語であることを示している。

「1日目」に特徴的に出現している言葉は、「作家」「生まれる」「アメリカ」「精神」「分かる」「文学」となっている。「アメリカ」に「生まれ」た「作家」や「文学」やその「精神」が「分かる」という意味を示しているように思われる。

「2日目」に特徴的に出現している言葉は、「英文」「単語」「勉強」「イメージ」「触れる」「捉える」「楽しい」「英語」などとなっている。「英文」や「単語」を「勉強」し、「触れる」際には、「イメージ」で「捉える」ようにすると「楽しく」「英語」を学べる、という意味を示しているように思われる。